地球を集める

レプリカで表現する

印東 道子
（いんとう みちこ）
本館民族社会研究部

企画展「ポリネシア文化の誕生と成熟」の入り口を飾るレプリカ

みんぱくに勤める考古学者として歯がゆい思いをすることがある。それは、研究対象とする資料を収集することができないことだ。発掘から出土する遺物にはときにはすばらしいものがある。わたしが研究しているオセアニアでは、エジプトや南米のような金製品はないが（もし見つかったら世紀の大発見だが、その可能性はまずない）、機能的なかたちをした釣り針や貝製の装身具類、そして独特な文様が施された土器片などがある。

これらの出土遺物は発見者のものにはならないし、購入することもできない。日本で研究する場合には、一年間の国外貸与許可をえてもち帰る。所有権はすべて現地政府にあるからだ。そのため、すばらしい出土品を博物館に展示したい場合は、レプリカを作ることになる。

発掘した土器を再現

レプリカでも十分に迫力のある場合がある。ラピタというポリネシア人の祖先が今から三二〇〇年前ごろに作っていた土器はまさにそのケースにあたる。ラピタ土器は、繊細な文様が施されて非常にもろいのが特徴である。そのため、遺跡から出土するラピタ土器は直径数センチメートルほどの小さな破片が大半だ。もとのかたちを復元することは非常に難しいし、破片を展示してもイメージはあまりふくらまない。

ところが、ニューカレドニアでラピタ土器のレプリカを作り始めた人がいると聞き、早速レプリカを二点注文し、その工程を記録するために二〇〇三年に現地へ飛んだ。製作者はニューカレドニア博物館の学芸員を長らく務めたジャン・ピエール・シオラ氏。氏はラピタ土器の文様に関する研究で修士号を取得した考古学者であり、アマチュアの陶芸家でもある。実際に氏が発掘した大きなラピタ土器片をもとに、大きさも文様もまったくそのままにレプリカを作って欲しいとお願いした。

シオラ氏が退職後に自宅に作った工房では、すでに土器がいくつかできていた。土器を作るには粘土をこねてかたちを作り、少々乾かしてから文様をつけ、さらに乾燥させてから火で焼く。今回はレプリカなので、まず、土器片をもとにして綿密な復元図面を作る。粘土は乾くと収縮するので、その収縮率を計算したうえでサイズを決めなくてはならない。土器のかたちやサイズはもちろんのこと、全体の文様も緻密に計算して描き込まれる。

ラピタ土器に愛着をもつシオラ氏は、市販されている人工粘土は使わない。あくまでニューカレドニアの粘土にこだわり、自宅そばで入手した粘土を庭に五年間うめて寝かせておいたものを使う。まず粘土を地面から掘り出して水に一週間つけたあと、五種類のサイズのふるいにかけて不純物をとりのぞく。

粘土だけでは作っているあいだに重みでかたちがゆがむために、砂を混ぜて強度を増す。ラピタ土器に使われていた粘土と海岸の砂（サンゴや貝の小片）の比（五対一）を忠実に守って、両者を混ぜ合わせて胎土を作る。

ここまでも大変な時間と労力であるが、さらに大変なのが文様つけだ。ラピタ土器の特徴は細かい幾何学文様を一ミリメートルにも満たない直径の点を連続させて表現するところにある。慎重に文様をつけてゆくかと思ったら、結構慣れた手つきでどんどん点線を連ねた線を描いていく。描くというか、先端に細かい突起をつけた道具を少しずつずらしながら粘土に押しつけてゆくのだ。文様の位置や順序を決めるのは難しいが、一旦はじめればリズミカルにつけてゆけるらしい。

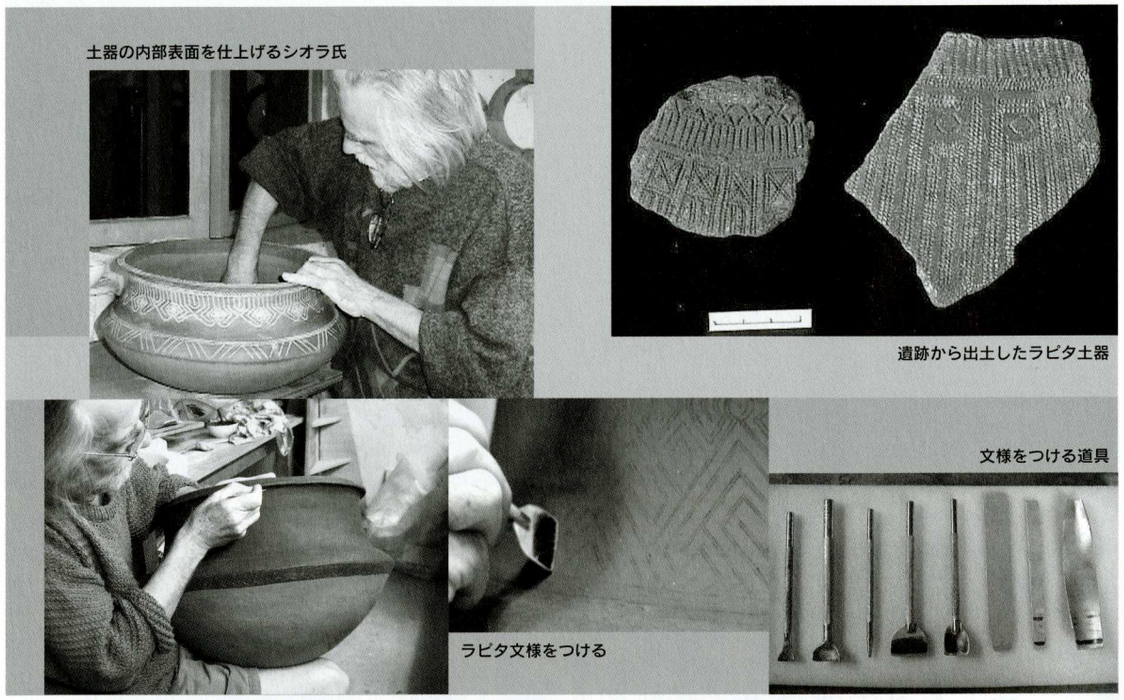
ラピタ土器を作った人びとが文様をつける道具として何を使ったのかはよくわかっていない。貝や竹、あるいはべっ甲などが考えられる。今回シオラ氏は金属の棒の先端が櫛（くし）状になった直線や弧状のものを何種類も作って使っていた。ここだけはこだわりのラピタ作りのなかの例外だった。

直径四五センチメートルの壺の文様つけには延べ六時間かかった。根気のいる作業である。それにしても、どこをとっても同じような間隔で直線や曲線が描かれているのは見事だ。

文様つけが終わると数日間乾燥させ、電気炉で焼成する。本来は縄文土器のように野焼きされたのだが、これだと壊れる確率が高いため、あえて冒険を犯さないことになった。それでも、いきなり高温に設定して焼くと、土器が割れてしまう。二時間かけて二〇〇度まで上げ、あとは毎時一〇〇度ずつ上昇させて六〇〇度まで上げたが、二時間たっても電気炉からはかなり水蒸気が出ていた。「まだ水分が多く含まれている」とブツブツ言っているのが聞こえたときには、思わず「割れないでくれ」と心のなかで祈った。一晩経って冷めるのをまってから炉のふたを開けるときが、もっともドキドキし、楽しい瞬間だ。

企画展を飾る

きれいな赤っぽい色に焼き上がった土器と対面したときには、この長い工程の最後に土器作りの人たちが味わう幸せがわかったような気がした。この土器はさらに文様が白く目立つように石灰がすり込まれて完成し、二〇〇四年に開催されたみんぱくの企画展「ポリネシア文化の誕生と成熟」の入り口を飾った。もはやホンモノの民族資料も収集しがたいことも多く、正確なデータに基づいたレプリカの存在も大切になっていくだろう。



土器の内部表面を仕上げるシオラ氏

遺跡から出土したラピタ土器

ラピタ文様をつける

文様をつける道具